

# 論文審査の要旨及び担当者

No.1

報告番号	甲 第 号	氏 名	布施 豪嗣
論文審査担当者	主 査	：中西 聡 (慶應義塾大学経済学部教授 博士(経済学))	
	副 査	：杉山 伸也 (慶應義塾大学名誉教授 Ph. D)	
		：池田 幸弘 (慶應義塾大学経済学部教授 Dr. oec.)	
	面接担当	：牧野 邦昭 (慶應義塾大学経済学部教授 博士(経済学))	
		：壽里 竜 (慶應義塾大学経済学部教授 博士(経済学))	
(論文審査の要旨)			
論文題名：石橋湛山の経済理論 自由貿易とナショナリズム			
<p>今般提出された布施君の学位論文は、日本経済思想史研究のなかでも比較的知られている存在である石橋湛山を対象に、経済思想史研究という見地からその思想的位置を確定させようという試みである。これまでの研究史については同君の学位論文に詳しいが、いままでは主として政治学研究者のアプローチがやや優勢だったこともあり、石橋の小日本主義が注目されることが多かったといえる。また、経済思想史研究者が湛山を扱う場合は、湛山のケインズ経済学との親和性が問題とされ、これは前記の政治学研究者の湛山解釈と一定の関係を持っていた。すなわち、全体としては、小日本主義を主張したケインズ学者としての湛山という側面が強調されていたといえる。今般提出された布施君の学位論文は、この間の事情を丁寧にときほぐし、いままであまり強調されてこなかった湛山と古典派経済学との関係なども分析の遡上にあげつつ、湛山の政治経済思想の総体を明らかにしようとするものである。以下、まずは各章の内容を要約的に紹介し、しかるのちに本論文にたいする評価を申し述べることにしたい。</p> <p>序章は研究史の整理であり、姜克實、長幸男などの古典的研究が紹介され、先行研究と本学位論文との関係が適切に整理されている。第一章は本論文の要の部分形成する章で、その意味できわめて重要である。日本におけるケインズ経済学の受容が要領よく説明され、その上で湛山の古典派側面が示されている。具体的には、「過剰生産はありうるのか」という論点がとりあげられ、湛山はこの問いにたいして明確にノーと言っている点が強調されている。その意味では湛山はセー法則の支持者であり、ケインズ経済学とは対峙する「側面」を有しているといえる。同章の最後の部分では、中山伊知郎や塩野谷九十九の湛山理解が示され、比較的近くにいた同僚経済学者たちは、湛山をかならずしもケインズ学者としてはみなしていなかったという本論文にとってはサポータティブな証拠があがっている。第二章は湛山思想の形成史に目を転じ、師ともいえる田中王堂と湛山との関係を問うている。王堂は人も知るように早稲田大学で教鞭をとった哲学者だが、その思想はアメリカ・プラグマティズムの影響が強いと言われている。王堂は福沢を敬愛しており、</p>			

その伝記をものしている。福沢の政策的処方箋の紆余曲折ぶりについては音に聞こえているが、その根底にプラグマティズム的な発想があったと考えると、理解しやすい。王堂にならった湛山も、思想が生活を導くのではなく、逆に生活が思想の源であるという立場を明らかにしている。王堂の思想の総体はかなり複雑であると考えられるが、湛山の源の一つとしての王堂思想は布施君が述べているように湛山の思想形成にとって基底的作用をはたすものだといってよい。第三章はすでにふれた湛山の小日本主義を経済思想史研究という観点から問題にする。湛山は米の専売制を主張しつつも、米の自給論は主張せず、国際分業体制に立脚した商工立国論を唱えている。その背景にイギリス古典派、なかでもリカードウの比較生産費があることは布施君の主張するとおりである。第四章は、1920-30年代にかけての湛山の貿易観の変化を問題としている。第一次世界大戦前の湛山は自由貿易論者であったが、三十年代に入り、時局が緊迫するにつれ、暫時その考え方を變えるに至り、理想としての自由貿易は堅持しつつも、当面はそれとは異なった自給自足体制を前提にせざるをえないと考えるようになる。これは湛山の思想の變化として重要な局面であり、本章は同時に次章へのプレリュードとなっている。第五章は前章を受けて、湛山のリフレッシュ政策を扱う。湛山のリフレッシュ政策はいわゆるリフレ派の湛山理解ではつとに強調されてきたところではあるが、それだけに布施君がこの問題をどう扱うは重要である。湛山は、リフレッシュ政策をある時期以降主張しており、それはたしかであるが、と同時に、通貨供給の増大が物価騰貴の要因なのか、あるいはその逆なのか、という古典的な問いにたいしては、原則の問題としては、通貨供給の変動は実態経済の結果であり、特別な場合に限って、それが能動的な役割を演じるという立場を堅持している。また、中央銀行の独立性についてはこれを強調する立場であり、政治が経済を主導すべきだとする高垣説にたいしては、冷や水を投げかけている点は、軽視されてはならない。第六章は、復興期の湛山の政策思想を扱っている。具体的には有澤広巳の経済政策的立場と、湛山のそれが比較され、その対比によってそれぞれの政策的見地が浮き彫りになるような工夫がこらされている。有澤はドイツ留学経験があり、かの地におけるマルクス主義陣営の論争はもとより、他の学派たとえばオーストリア学派の理論についてもよく知っていた。このため、我が国における闇経済の浸透が生産の短期化をもたらすという認識を持つことができた。政策としては、よく知られているように、傾斜生産方式の主張者であった。他方、湛山はまったく異なった認識を持っていた。限られたセクターへの資金的投与については、彼は批判的である。湛山によれば、社会経済というのは一つの有機体であり、局所的なセクターの問題は全体の動きのなかで理解しないと具合が悪いとされている。このように湛山自身は統制経済という発想そのものに批判的であり、これがGHQの批判を招いたとされる。第七章では、戦後の湛山の思想的立場が問題にされている。湛山の立場は勤労の勧めではあるのだが、それは同時に国民の義務でもあり、新憲法における権利のみの

主張について湛山は批判的である。ここに王堂を通じて、福沢の政府と人民についての理解を見ることは見当はずれではないはずである。福沢にとっては、人民は政府の担い手でもあり、たんなる受動的な主体としての人民は彼が嫌ったところでもあったからだ。湛山も政府の担い手としての積極的な主体としての人民に期待してやまない。終章はいままで  
の章のまとめでもあり、また学位論文全体の要旨を示す。

以上が布施君の学位論文の要旨であるが、以下審査者による評価にうつる。本学位論文の最大の貢献は、きわめて多様な形で展開されている湛山の経済思想をとくに、その古典派受容を軸に、詳細に検討したことである。これは、劈頭にのべたように、いままで一般的だった、湛山=ケインジアンという理解という通説的な理解からすれば、新しい湛山理解を提供したといえる。とくに、具体的にいえば、古典派の文献からの直接的な引用を含めて、湛山のテキストと比較したことは、同君の貢献といわなければならない。

また、同時に中央銀行の理解についても、湛山は政治からの影響という点では、よしんばそれが払拭できないとしても、スタンスとしてはかなり抑制的であり、それが過度であってはならないと厳しく批判している。これも、現在の中央銀行論の混乱などに鑑みて、重要な湛山理解を示しているといえる。

さらに、湛山の思想的出自として王堂をあげ、具体的にその連関を明らかにしようとしたのは、同君の貢献といえる。湛山の思想がともすれば、あちらに行きこちらによるめき、という感じを強く印象付けるのは事実なのだが、その根底には、王堂を経て、プラグマティズムに通じるものがあるという理解は新鮮である。

以上のような貢献が本学位論文のメリットだが、審査者の立場からは若干の批判と注文もあわせてのべておきたい。

まずは、諸外国の影響を受けた日本経済思想史を問題にするさいには、まずもってまぬがれえない問題だが、古典派の中身、ケインジアンの中身を特定するのは容易ではない。古典派は多数のメンバーを有しているし、ケインズその人に限定しても、著作による振れ幅がきわめて大きく、それがあまたの文献群を毎年再生産させているという研究史の現状がある。こういう現状に鑑みた場合、日本経済思想史の研究者が参照のフレームワークとして使うこれらの概念はそれら自体が研究対象となっているという点からしても、さらに精密な理解が求められる可能性も否定できない。

さらに、本学位論文の卓越性を傷つけるものではないが、湛山が接した現実についてのさらなる研究は必要かもしれない。これは、本学位論文が経済思想の論文として評価されるべきだという観点からすれば望蜀の類だが、その場その場で「現実的」な対応を模索した湛山研究にとっては、経済史的背景の分析はさらに求められるという批判はありえよう。経済史領域におけるさらなる研究文献の味読と活用は必要である。

また、上記ではメリットとして指摘した古典派と湛山という問題設定がやや狭すぎると

いう批判もありうる。経済学史研究としてはそれでよいとしても、湛山の経済的理念総体に迫るといふ観点から、別の軸を基準にして全体を整理することは可能であろう。

しかしながら、以上の問題を考慮しつつも、すでに述べてきたように、本学位論文は、湛山研究にとって新しい視点を提供しており、学位論文としてふさわしいものと評価される。審査員は満場一致で、布施君にたいする博士号の授与に賛成するものである。